

# 町村週報

(町村の購読料は会費)  
の中に含まれております)

## 2847号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 山中昭栄：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

屋久島宮之浦岳 (鹿児島県屋久島町)



### もくじ

- 政 策
- フオーラム
- 情 報
- 情 報
- 随 想

- 団塊世代が65歳に突入り、高齢社会の先導役として期待——平成25年版高齢社会白書……………(2)
- 「土祭」から始めるプロモーション〜風土と工夫、人と暮らしの魅力を形に〜 栃木県益子町……………(5)
- 新任都道府県町村会長の略歴……………(10)
- 町村Navi……………(11)
- 自信と誇りを持てる村へ『世界遺産と水源の里』……………青森県西目屋村長 関 和典……………(12)

### コラム

## アルコール依存症は遺伝子が原因か？

筑波大学名誉教授 村上 和雄

我が国の飲酒人口は6000万人を超えている。酒は百薬の長といわれるように、適正な飲酒の効用は医学的にも証明されている。ストレスの軽減はもとより、総死亡率および心血管系疾患の死亡率を低下させる効用も明らかになっている。一方、その害は深刻である。アルコールの害は臓器に障害をもたらすにとどまらず、飲酒運転の悲惨な事故や、家庭の崩壊などを引き起こす場合も少なくない。

アルコールという物質はなぜ依存症を生みやすいのか。

その1つの鍵となるアルコール依存症の遺伝子が見つかった。さらに、同じ家族や家系の中でも、アルコール依存や乱用の度合いが一段と高い人は、この遺伝子の数が多いことも分かった。これにより、アルコール依存症になる素質は、遺伝的要因によって決まることがはっきりした。しかし、アルコール依存症の遺伝子を持つからと言って、その人が必ずしも依存症になるわけではない。その人が酒を飲まなかったら、依存症にはならないからだ。

これは、至極当たり前のことだが、重要な意味をはらんでいる。つまり、飲める・飲めないは遺伝子が決めても、飲む・飲まないは自分が決めるということである。

言い換えれば、アルコールを絶対口にしないという意志が、生得の遺伝的要因に勝るといふことであり、人は遺伝子にのみ左右される存在ではないということだ。このことは、私の研究分野である心の働きと遺伝子の相互関係にも通じるところがあるように思われる。

精神分析学の大家カール・G・ユングは、重いアルコール依存症の患者について、「あなたは医療や精神医療ではどうにもならない。スピリチュアルな体験をすれば、つまり真の転換を体験すれば、回復可能かもしれない」と。

酒を断つような環境をつくり、依存者が助けあうような場を整え、そして、いま生かされていることに感謝できるような心になれば、依存症にかかわるさまざまな遺伝子のスイッチをオフにすることが可能であると考えている。

### ◎写真キャプション◎

永田岳、黒味岳（または栗生岳）と共に屋久島三岳の一つとされる宮之浦岳は、屋久島の中央部に位置し、九州地方最高峰の標高1936メートルを誇る。なお、宮之浦岳と永田岳の鞍部を流れる宮之浦川は「屋久島宮之浦岳流水」として名水百選に選ばれている。

## 政策解説

# 団塊世代が65歳に突入 ～高齢社会の先導役として期待～

## —平成25年版高齢社会白書—

政府は6月14日の閣議で平成25年版高齢社会白書を公表した。白書は二部構成になっており、「平成24年度 高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況」では、統計資料から見る高齢化の状況報告と、平成24年度に政府が講じた高齢社会対策の実施の状況について報告。「平成25年度 高齢社会対策」では、平成25年度において講じようとする高齢社会対策について明らかにしている。

### 加速する社会の高齢化

平成24年10月1日現在、日本の総人口は1億2,752万人。65歳以上の高齢者人口は、過去最高の3,079万人(前年2,975万人)となり、総人口に占める割合(高齢化率)も24・1%(前年23・3%)となった。総人口が減少し続けている一方、高齢者人口は今後、「団塊の世代」が65歳以上となる平成27年には3,395万人となり、「団塊の世代」が75歳以上となる平成37年には3,657万人に達すると見込まれている。平成25年には約4人に1人が、平成47年には約3人に1人が65歳以上に。平成72年には約2・5人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳以上になる社会が到来すると推計されている。昭和25年には、高齢者1人に対して15・64歳の現役世

代が12・1人であったが、平成24年には、高齢者1人に対して現役世代は2・6人、平成72年には高齢者1人に対して現役世代は1・3人になると予測されている。

平均寿命は、平成23年現在、男性79・44年、女性85・90年と、前年に比べて男性は0・11年、女性は0・40年下回ったが、今後は男女とも延びて、平成72年には、男性84・19年、女性90・93年となり、女性の平均寿命は90年を超える見込まれている。

高齢化の要因について白書は、要因は2つあるとしている。まず、平均寿命の延伸による65歳以上の人口の増加である。これは生活環境の改善、食生活・栄養状態の改善、医療技術の進歩等により、乳幼児や青年の死亡率が大幅に低下したことによる。次に少子化の進行による若年人口の減少を挙げている。合計特殊出生率は、平成17年には1・26と過去

最低を記録したが、平成23年は1・39となっている。社会保障給付費全体についてみると、平成22年度は103兆4,879億円となり過去最高の水準。国民所得に占める割合は、昭和45年度の5・8%から29・6%に上昇し、こちらも過去最高の水準となった。高齢化率を諸外国と比較すると、世界のどの国もこれまで経験したことのない高齢社会を迎えていることがわかる。

### 健康には不安あるも 経済状況は心配なし

高齢者のいる世帯は増え続けており、全体の4割を占める。そのうち「単独」「夫婦のみ」世帯が過半数で、子どもとの同居は減少し、一人暮らしの高齢者が増加傾向にある。

経済状況を見ると、「まったく心配ない」「それほど心配ない」の合計が71・0%である。平均年間所得では、高齢者世帯と全世帯の世帯人員一人当たりの年間所得に大きな差はなく、公的年金・恩給受給世帯の約7割は、公的年金・恩給の総所得に占める割合が80%以上になっている。貯蓄は全世帯平均の1・4倍で、「病気や介護への備え」という回答が62・3%で最多である。

健康については、有訴者率(人口1,000人当たりの「1」の数日、

政 策

病気やけが等で自覚症状のある者(入院者を除く)の数が471・1と、半数近くの人が何らかの自覚症状を訴えている。要介護者等は、特に75歳以上で割合が高く、介護者の続柄は、配偶者、子、子の配偶者等、6割以上が同居している人が主な介護者となっている。介護者の年齢は、男性64・8%、女性60・9%が60歳以上であり、老老介護が相当数存在していることが分かる。介護を受けたい場所、最期を迎えたい場所は共に自宅が過半数超となっている。

団塊の世代の意識

いわゆる団塊の世代が65歳に達し始めた。平成26年まで、毎年約100万人ずつ増加することになるが、社会の様々な分野の第一線で活躍してきた経験を生かし、今後の超高齢社会を先導する役割と、雇用、就労、社会参加活動における活躍が期待されている。

団塊の世代の主な収入源は「年金」で53・4%、「給与」31・6%、「事業や不動産の収入」10・2%が続く。世帯年収についてみると、「240万円〜300万円」が最も多く17・3%、「300万円〜360万円」14・0%、「360万円〜480万円」14・0%である。480万円以上が

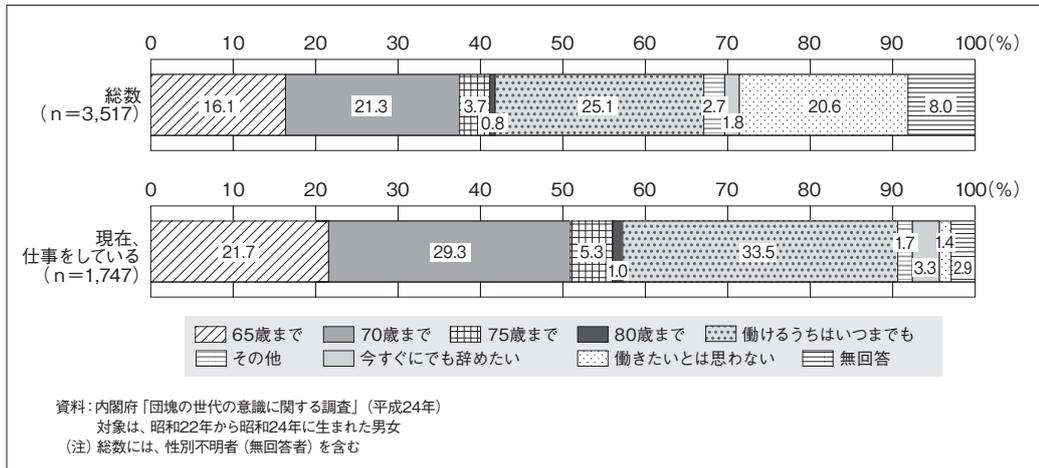
18・8%いる一方で、120万円未満(収入はないを含む)が8・3%となっており、所得格差は大きいとしている。

就労形態について見ると、パートやアルバイトで働く人が多く、仕事をしている理由は、「生活費を得るため」が最も多く73・0%、「将来に備えて蓄えを増やすため」43・0%、「ローン返済のため」23・0%、「生活費の不足を補うため」21・3%の順になっている。いずれの時点でも「生活費を得るため」の割合は高いが、60歳の時に比べると、経済的理由が減少し、「健康維持のため」32・3%や「生きがいがあるため」22・5%といった経済的理由以外の理由が増加している。何歳まで働きたいか就労希望年齢をみると、「働けるうちはいつまでも」が最も多く25・1%、次いで「70歳まで」が21・3%である。特に、現在仕事をしている人に限ってみると、「働けるうちはいつまでも」が33・5%、「70歳まで」が29・3%、「75歳まで」が5・3%で、65歳以降も働くことを希望する割合は69・1%と高くなっていることから、この就労意欲の受け皿の整備を図ることが必要であるとしている。高齢期は体力や健康に個人差が生じ、働き方のニーズも多様化。さらに企業に向け

た支援も必要としている。

社会参加への意識も低くはなく、地域活動、ボランティア活動等に参加している人の割合は38・7%(男性41・8%、女性35・5%)。現在参加していない人も、その理由は「仕事が忙しく時間が足りない」が最も多く34・8%(男性40・3%、女性29・7%)である。今後参加したいと考える社会活動をみると、男性では、「趣味、スポーツ活動」が33・3%で最も多く、次いで「地域行事(地域の催し物の運営、祭りの世話役など)を支援する活動」18・0%、「地域の伝統や文化を伝える活動」15・1%となっている。女性では、「趣味、スポーツ活動」が30・3%で最も多く、次いで「一人暮らしなど見守りが必要な高齢者を支援する活動」23・6%、「地域行事(地域の催し物の運営、祭りの世話役など)を支援する活動」12・2%、「子どもを育てている親を支援する活動」12・2%となっている。この数字からも団塊世代は、地域における様々な社会活動への参加意

参考 団塊の世代の就労希望年齢



向を持っているとしている。社会活動への参加のきっかけをみると、現在参加している人では、「友人や地域住民と一緒に参加できた(友人や地域住民から誘われた)」が最も多く36・6%、「自分がやりたいと思

政 策

う活動があった」24・5%と続いており、参加意欲が増すような活動の場や情報が提供できれば、参加は進むのではないかとしている。

これからの高齢社会対策

政府の基本的方針である「高齢社会対策大綱」では、「高齢者」の捉え方の意識改革、老後の安心を確保するための社会保障制度の確立、高齢者の意欲と能力の活用、地域力の強化と安定的な地域社会の実現、安全・安心な生活環境の実現、若年期からの「人生90年時代」への備えと世代循環の実現の6つを基本的考えとし、高齢社会対策を推進している。社会保障制度については、社会保障・税一体改革に関連する法案が成立。また、社会保障制度改革国民会議が設置されている。

平成25年度の高齢社会対策としては、全員参加型社会の実現のための高齢者の雇用・就業対策、生涯にわたる健康づくりの推進、社会参加活動の促進、高齢者に配慮したまちづくり、犯罪、人権侵害、悪質商法等からの保護等、時代の変化に即した施策を行っているとしている。

最後に、白書で紹介されている各地の取り組みについて、山口県山口市「夢のみずうみ村山口デイサービス

センター」では、施設に通う要介護者に、楽しみながら自身に埋もれている能力を引き出すようなユニークな仕掛けを多数整備している。「バリアフリー」という施設外での生活範囲を広げることを目的に設置された仕掛けでは、段差や坂、階段など日常生活で遭遇するバリアを意図的に配置し、利用者自らでバリアの克服方法を習得するとしており、施設内の通貨「YUME(ユーメ)」という仕掛けでは、施設内のいたるところで通貨を入手、使用できるようになっており、利用者の注意力や理解力、推測力、計算能力、計画性などを培うことが出来るとしている。

また、福岡県では、「65歳からは高齢者」という意識を改め、年齢にかかわらず、それぞれの意思と能力に応じて様々な形で活躍し続けることができる「70歳現役社会」の実現に向け、平成24年4月に総合的な支援拠点として「70歳現役応援センター」を開設している。

【記事の訂正について】

町村週報2014年6月の目次及び3ページの表題に「平成26年度政府予算編成及び政策に関する要望を決定」との記載がありました。この「施策に関する」の誤りです。

お詫言ひして訂正いたします。

# 年次有給休暇の取得促進

— ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて —

## 計画表の活用

- ★休暇使用計画表の作成・活用
- ★休暇使用状況の定期的把握

## 取得しやすい環境づくり

- ★上司が率先して休暇を取得
- ★部下に休暇取得の声かけ

## 連続休暇等の取得促進

- ★夏季における1週間以上の連続休暇取得
- ★月曜日又は金曜日の休暇取得
- ★家族記念日に休暇取得

フォーラム

広大な関東平野の中心・東京から北東へ車を走らせ二時間を過ぎる頃から、視界に広がる空の裾になだらかな山の連なりが見え始めます。栃木県益子町は、関東平野の北の端に位置し、同時に、八溝山系を中心に東北へと連なる山々の南の端でもあります。人の暮らしのすぐ隣にありながら豊かな自然を残す里山、はつきりとした四季。

農業と窯業・土の里、益子



「益子町は、核となる観光の目玉があるからいいですね」とよく言われることですが、時として、それはマイナスの要素になる可能性も持っています。多くの観光客を集める陶器市にしても「年々、来場者の財布の紐は固くなる一方」と嘆く声があり、益子駅

陶芸の町の、その先へ。

その風土の中で、古くから農業と江戸時代末期に始まった窯業という、「土」に依り暮らしに密着した産業が、人の手によって丁寧に営まれてきました。窯業においては、今では窯を持つ陶芸家は400人を超え、年に2回開催される陶器市は、春秋合わせて毎回60万人を超える集客があります。また、欧米を中心とした工芸界においては、陶芸家で人聞国宝となり、民藝運動の旗手でもあった濱田庄司の名とともにMASHIKOの地名は広く知られるところとなっています。

現地レポート  
地域資源を活かした活性化策

「土祭」から始めるプロモーション  
風土と工芸、人と暮らしの魅力を形に



△益子町のアートイベントの祭「土祭／ひじさい」は、第1回が2009年9月19日（新月）－10月4日（満月）に、前・土祭が2011年9月11日（讒望）に、第2回が2012年9月16日（新月）－30日（満月）に開催され、第3回を2015年に予定している。写真は、特設の舞台で行われた芸能の様子。

フォーラム

から陶器店が並ぶ通りまでの間にあ  
る、かつてはさまざまな小売店が軒を  
並べていた旧市街地区は、シャッター  
を下ろす店が増え、活気をなくした状  
況にあることは否めません。そのよう  
な状況において「現状を変えていかな  
ければ!」という思いで策定したのが、  
2005年の「益子再生計画」です。  
「10年先、20年先を見据えて、益子に  
もう一度、元気と活力を取り戻したい」  
という願いで、「環境」「健康」「文化」  
の3本柱を立て実行項目を策定しまし  
た。「文化」分野で「世界に誇れる文  
化都市、益子」を具体化していくため  
の1つのイベントとして計画されたの  
が、2009年に第1回、2012年  
に第2回目を行った「アース・アート・  
フェスタ 土祭」です。

土の祭と書いて、「ひじさい」と呼  
びます。あえて、土の古来の呼び名「ひ  
じ」を用いたことにも象徴されるよう  
に、今までにない視点から私たちの町  
をとらえ直し、外に向けて発信してい  
こう、という試みです。アートによる  
地域起こしとしては、規模の大小やコ  
ンセプトなどの面でも実にさまざま  
アートイベントが全国各地で展開され  
ていますが、益子町が目指したものは、  
小さいながらも益子ならではの個性が  
光る祭です。中央からアーティストを  
招聘して街中に作品を配置して終わ  
り、というものではなく、この土地の  
風土から、この土地にゆかりの作家た

ちによって立ち上がる表現です。作り  
上げていく過程も、イベント会社など  
外部の力に頼るのではなく、役場職員  
と住民の官民協働で、この土地の人々  
が心を入れて作り上げていく「祭」と  
してのイベントでした。

第1回は、「あらゆる生命の源であ  
る土」「民藝以前の益子」をテーマとし、  
旧市街地のシャッター通りを会場にし  
ました。そして第2回は、「土」から  
一歩進み深めて、「風土、歴史、自然  
環境」をテーマとし、エリアについて  
は、陶器店が並ぶ通りや、1194年  
建立と言われる神社が佇む益子の懐深  
く入り込んだ地域にも会場を広げまし  
た。歴史ある神聖な場所とはいえ、ふ  
だんはあまり訪れる人もいない所に、  
人の手を入れて息を吹き返させ、地元  
の人もスタッフも来場者も、そこから  
生まれる表現を分かち合い、先人の遺  
産を未来に繋げていこうという願いが  
ありました。

地球の上の小さな共同体として

東日本大震災では、益子も多くの被  
害を受け、あらためて「幸せな暮らし  
とは?」「今日の延長上にある未来と  
は?」について考えることが多い日々  
が続きました。官民あけて復興への道  
を歩み、2回目の土祭への準備を進め  
る過程で、「これからの暮らし方につ  
いて考える手がかりを創出していこ

う」と、「マシコ・アース・ヴィレッジ」  
という新しいコンセプトを加えまし  
た。

先人たちの知恵、技術の背景にある  
思想などを学び直し、「益子から提案  
できる、暮らし方」を表現しようとい  
う試みです。間伐の竹で作ったテント、  
飲食ブースで使用した非電化冷蔵庫、  
夕方からの演奏会を行う広場に灯した  
和紙と竹の提灯などは、地元住民や近  
隣の高等学校の生徒さんたちとワー  
クショップで制作しました。

2012土祭

準備と会期中の様子。公式ウェブサ  
イト <http://hijisai.jp/>



▷百本以上設置した「のぼり」も、間伐し  
た竹や布を使って手作り。

◁1194建立の神社では、境内とその  
周辺の森を散策しながら楽しめる「音」  
の展示を行いました。



▷歴史ある酒屋さんの奥座敷では、自然  
と命をテーマにした立体作品を展示。

フォーラム

都市生活者の共感を呼んだ土祭

土祭は、明日の町づくりのための実践とチャレンジの場であり、また、これからのプロモーションを考えるためのマーケティングの場でもありました。特に第2回目の土祭で集計した来場者アンケートの結果は貴重なデータとなりました。

4段階の選択肢で問いかけた満足度調査では、「とても満足52・4%」「まあまあ満足40・5%」との数値で93%の方に概ね満足の評価をいただきました。居住地の内訳で見ると、近隣では宇都宮市やつくば市など、また東京都内の数値が高く、大都市の方ほど土祭の世界観に共感し満足いただいている様子が、フリーアンサーの記述からもうかがえました。

「とても楽しめました。土地と作品の良さをどちらも活かした展示だと思います。よりその世界に入り込むことができました。また訪れたいです。(東京20女)」「新旧がまじりあっていて、別世界を感じられて美しかった。迷っていると皆さんが親切に声をかけてくださり、地元の人祭を盛り立てようとする気持ちが伝わりました。(東京60女)」

アンケート以外にも、ネット上で個人ブログやTwitter、Facebook上にあげられた情報もできるだけ拾い、感

想を収集しました。それらをもとに、益子町PRのメインターゲットとした属性モデルを「首都圏で働き、工芸やデザインに感性が高い30代の女性」と考え、次年度からのプロモーション事業の参考としました。

益子に関心を寄せてくださる人達が求めているものと、益子が持つ「資源」が、土祭をきっかけに、とてもいい感じで重なり合ってきている。そこに小さいながらも確かな手ごたえを感じました。それらをどう整理して、町の訴求として伝えていくか。益子町のブランディングを再構築することを課題として、2013年4月、観光商工課内の土祭事務局は新設されたタウンプロモーション係へとバトンタッチ。次に、益子町プロモーション事業、初年度の取り組みについてお伝えしたいと思います。

故郷の次に大切な町へ

都内から車や電車で2時間ほどの場所。リフレッシュできる自然環境に恵まれ、体に優しい食事ができる気の利いたカフェがあり、大量生産品ではなく、人の手のぬくもりがある手仕事の品が買えるような場所。メディアが喜びそうな、そんな田舎町は、益子以外にも、いくつもあります。

町のPRを行っていくにあたっての1つのゴールイメージは、「首都圏で

◁地元高校生と観光ボランティア団体が一緒に事前研修をして、観光客の方々にガイドしました。



暮らす人にとって、自分の故郷に次いで、何度でも訪れたい大切な町として位置づけられること」です。

「大切な町」になるためには、消費行動から一歩踏み込んだところで、心のつながりを築くことが必要だと考えます。例えば、そこに暮らす魅力的な人と出会い繋がれる町、訪れるたびに知るたびに、これからの自分の生き方や暮らし方の手がかりが得られる町、自然や古い建物などの環境に都会暮らしで忘れていたような原風景を見出せる町、短時間でも地に足がついた体験ができる町……。まだまだ漠然としています。今後、さまざまな事業

◁伝統芸能や演奏会の舞台や屋台を設けた広場では、観光客や町民が一緒にたつ夕暮れ時の時間を楽しみました。



を通して深めていきたい課題です。

ふたつのチャレンジ

「何度でも訪れたい大切な町」を目指して、初年度は都内での益子町PRの展示イベントを行い、益子発信の雑誌の創刊準備を進めています。

「渋谷に土を。益子の森を。」をキャッチコピーとして、5月29日から6月10日までの13日間、渋谷の駅ビルに隣接した新しい商業施設「ヒカリエ」の8/CUBE1.23というギャラリーで、益子のプロモーション展示を行いました。「土」「森」「人と祭」をテーマに

フォーラム

したインスタレーションです。使用したギャラリーは、毎年11月に公募を行っており、土祭を通して益子町がメインターゲットと考えている層にPR

できる場所でもあり、感度が高く周囲への影響力も高く、有効な口コミを創出してくださる層が集まるフロアでもあります。観光商工課土祭事務局(当時)で企画書を提出ブレゼン。自治体のPRとしては前例がないとのことでしたが、12月に審査をクリアし、年明けから企画制作チームを組織して、打ち

合わせを重ねながら準備を進めてきました。企画制作については土祭と同じく、外部のディレクターや展示のプロ集団に外注するのではなく、役員職員と益子在住の作り手たち、益子や土祭ゆかりの都内在住の写真家などの協働プロジェクトで行いました。展示が始まってからは、ご来場いただいたアート関係者の方などから、クオリティが高いとお褒めの言葉を頂きました。

会期中は、タウンプロモーション係の職員がシフトを組んで連日在廊し、来場者の方に対しての案内は、掲示するキャプションやサインボードに任せることなく、作品はもちろん、益子町や土祭についても、できるかぎり話しかけ、直接お伝えするようにしていました。その会話や、会場に置いた感想ノートなどから来場者の声を紹介します。「益子町は陶芸だけの町ではないんですね」「益子は心の処方箋」「行っ

てみたくなりました！」など、嬉しい言葉が並びました。

会期中2回目の日曜には、隣接するイベントコートで「益子の食卓市」も開催しました。「暮らしのまんなかにある食卓まわりのさまざまなものが益子では丁寧にならされている」ことをアピールする市で、陶器だけでなく、木

工品、染織、野菜、果物、加工品、天然酵母のパンなどが並び、終了時刻までにぎわいを見せていました。同じフロアのDEPARTMENTが運営するd47食堂では、タイアップ企画として、益子の野菜を用いて益子焼の器で提供する「益子定食」をメニューに加えていただきました。好評につき、会期終了後も8月1日までに延びました。

益子発、人と暮らしを伝える 雑誌の創刊

2つ目の事業として、9月に益子町発信の本(年2回発行の雑誌スタイル)を創刊します。土祭と同じように、外注丸投げはしないで、官民協働の編集チームで企画から編集・制作までを行い、土祭データから想定したメインターゲットの方たちが集まる首都圏の店舗や施設、書店などで頒布していたく予定です。

目的は、先に述べた「故郷に次いで大切な町」として益子町を好きになっていただくため。この一言に尽きます。

では、何を伝えるか? 「益子の人と暮らし」を伝えます。どんな風に伝えるか? 「情報ではなく情景」として伝えます。情景。これは、民間の事業との差別化としてのキーワードです。

益子町は、自主的にイベントなどを行う企画力と情報発信力がある陶芸家の団体がいくつかあり、また、生産者や作り手を中心となって行われる「市」も盛んで独自の情報発信を行っています。観光協会だけでなく、地域コミュニティや民間の任意団体も益子のさまざまな情報を独自のスタイルで発信しています。

イベントや店舗、商品などの「情報」を発信していくのが民間メディアとするならば、町の役割は、益子町の本質的な魅力をしっかり伝え発信していくことだと考えます。この土地の風土と、そこに暮らす人、人の暮らし。その様子を丁寧に細やかに拾い、描き伝えていくことを「情景」という言葉で表現しています。

テレビでもネットでも紙媒体でも、次々に新しいモノコトが伝えられる情報過多の時代です。まず、情景(1本質的な魅力)を伝えることで共感をもって受け入れられ、基本的な信頼関係が築けたら、その相手から発信される観光情報も、受け流すことなく、キャッチしていただけたらと思います。これからさらに多くの方々とお会い、大切な場所として心に留めていた

だけのようなPR活動を展開していきたいと考えています。(観光商工課タウンプロモーション係)

2013都内でのPR

渋谷ヒカリエ8/CUBE.23での展示とイベントの様子



ギャラリー入口の左右ウィンドウには、益子の原風景ともいえる大正昭和初期の写真パネルと昔の窯道具などを展示した。中央に見えるのは、CUBE2に、人と祭の写真とともに設置した土舞台。供物台には益子で採れた麦や野菜を。

## フォーラム



◇「森」の部屋。暗くした空間に益子の森の写真を大きく展示し、栃木の山中で命を落とした鹿の骨や角から彫られた彫刻作品を展示。益子の森で採取した鳥や虫の声、沢の音などで制作した音も流した。



△連携イベント、「益子の食卓市」。30人あまりの出店者が来場者との会話を楽しみながら益子町と益子で作られる農産物や加工品、陶磁器、工芸品をアピール。



△「土」の部屋。多彩な色と表情を持つ益子の土で作った急須と光る泥団子。什器も益子の土を用い左官仕事で制作。登り窯の窯出しの時に聞こえる「貫入の音」を採取・編集した音を流した。

## 町村専用ページ「町村.com」をご覧ください

● <http://www.zck.or.jp/choson/> ●

全国町村会では、全国の町村との連携を密にし、町村長と町村職員のみなさんの情報収集の利便性を向上させるため、町村専用ページ「町村.com」を開設しています。

「町村.com」では、全国町村会の活動状況や中央省庁などの政策情報を随時ご提供しているほか、全国の町村の先進的な取り組み事例をはじめ、各種統計資料など様々なデータも公表しています。

私どもは、「町村.com」が町村関係者にとって真に役立つホームページとなることを目指し、これからも充実をはかっていきたいと考えていますので、ご覧になったご感想・ご意見を、下記のメールアドレスにお寄せください。



[kouhou@zck.or.jp](mailto:kouhou@zck.or.jp)

- ・「町村.com」は、町村関係者の方だけがご利用いただける専用ページです。ご覧になる際は、所定のパスワードが必要になります。
- ・ユーザー名とパスワードは、各町村にお知らせ済み(平成18年9月27日付)ですが、お問い合わせは、全国町村会広報部までメール(kouhou@zck.or.jp)でお願いいたします。

情 報

新任都道府県町村会長の略歴

茨城県町村会は平成25年6月17日の町村長会議(臨時会)で次の通り会長を選出した。(6月17日就任)

茨城県町村会長  
東茨城郡大洗町長

小谷 隆亮  
昭和14年5月20日生



【住所】茨城県東茨城郡大洗町磯浜町2-905番地

【町村長としての当選回数】5回

【町村長に就任するまでの経歴】▽昭和33年大洗町役場に就職▽62年 大洗町役場を退職▽63年 大洗町助役に就任(3期)

【町村会関係の経歴】▽平成19年 茨城県町村会監事▽21年 茨城県町村会副会長

【主な業績】

▽中学校校舎を教科教室方式により建替え▽小学校を統合し校舎建設(大洗小学校開校)▽教育センターの設置▽スウェーデン・ニーショーピン市と友好都市を締結し中学生を派遣▽コミュニティバスの運行▽企業誘致(大洗リゾートアウトレット、めんたいパーク)▽海水浴場をバリアフリービーチとして整備▽特定健診の本人負担分を助成▽子育て支援体制の強化(保育料の軽減、学校給食費への補助)▽町営住宅の建設▽土地區画整理事業を推進し、良好な宅地へ整備▽給食調理業務の民間委託▽公立保育所の民営化▽津波被害施設の高台移転(保育所・消防団詰所)▽原子力関連企業の誘致▽大洗港へのクルーズ船(客船)誘致

【趣味】テニス・読書

【家族】妻・長男夫婦・孫

愛知県町村会は平成25年6月12日の理事会で次の通り会長を選出した。(6月17日就任)

愛知県町村会長  
知多郡武豊町長

羽山 芳輝  
昭和22年7月12日生



【住所】武豊町大字富貴字寺東30番地

【町村長としての当選回数】3回

【町村長に就任するまでの経歴】▽昭和47年 武豊町職員▽平成6年 産業課長▽8年 企画課長▽10年 企画情報課長▽13年 総務課長▽17年4月 武豊町長

【町村会関係の経歴】▽平成21年 知多郡町村会長▽同年 愛知県町村会理事

【主な業績】

▽小中学校施設耐震化の完了▽コミュニティバスの運行▽緊急地震速報・同報無線のデジタル化、防災専門官の配置、津波避難ビル指定▽子育て支援センター整備、中学卒業までの医療費全額補助▽観光協会、観光ガイドボランティア協会の発足

【趣味】ゴルフを始めスポーツ全般、野菜作りや散策、英会話

【家族】妻

鳥取県町村会は平成25年6月26日の定期総会で次の通り会長を選出した。(6月27日就任)

鳥取県町村会長  
東伯郡北栄町長

松本 昭夫  
昭和26年2月27日生



【住所】鳥取県東伯郡北栄町江北671

【町村長としての当選回数】3回

【町村長に就任するまでの経歴】▽平成6年6月 北条町議会議員▽13年11月 北条町長▽17年10月 北栄町長(2期目)

【町村会関係の経歴】▽平成21年 鳥取県中部町村会会長▽同年 鳥取県町村会副会長

【主な業績】

▽旧大栄町と旧北条町との合併▽北条町自治基本条例制定▽北条砂丘風力発電所事業▽北条小学校校舎・プール改築▽学校給食センター統合・改築▽北条認定こども園統合設置▽福祉事務所の設置▽町内伝送路光ケーブル化事業▽青山剛昌ふるさと館開館▽台湾台中市大肚区、滋賀県湖南市交流協定締結

【趣味】野球、ゴルフ、読書

【家族】妻、父



何かと面倒な相続手続き、  
お手伝いいたします。

遺産整理業務

[わかち愛]

※遺産整理業務には所定の手数料がかかります。※遺産整理手続き完了時(例)遺産額2億円の場合、遺産整理業務手数料2,887,500円(消費税込み)。(平成17年10月1日現在)



お問い合わせは ☎0120-349-250 ご利用時間/平日・土・日 9:00~17:00(祝日等を除く)  
(回線がつかまりましたら 目印を押してください。)



その人を信じて、  
その人に託す。  
Meet The Trust Bank



http://www.smtb.jp 三井住友信託銀行 検索

## 随 想

『自信と誇りを持てる村へ  
世界遺産と水源の里』

青森県西目屋村長 関 和 典



おります。村民の姿勢にも凜とした心意気と静かな達成感が見受けられ、村民融和のもと一丸となって村が新しい時代へと動きだしており、その中で活気と躍動を覚える地域へと変化していることを確信しているところでもあります。

今後とも、子育て支援対策に力を入れ、高校卒業までの医療費及び、保育料、妊産婦健診無料化などを継続したいと考えております。今年度からは、日本小児科学会が推奨する全15種類の予防接種全てを無料化し、医療・教育の分野で総合的な支援策を拡大することができました。

さらには、行政改革によって得たお金を「物から人へ」と村民に還元させることで政策推進に反映させ、村営住宅の整備によって若者世帯の定住促進に全力で取り組んでまいりたいと考えております。これは、村民が住民投票によって自立する村を選んだことを最大限尊重すると共に、小さな村として人口が少ないことを逆に利点にし、政策の選択と集中に努力しながら二度も集落移転を余儀なくされた方々のためにも、津軽タムの早期完成を目指す使命があると考えているからです。

確実に西目屋村が変わってきていると良い評価をいただき、今後とも

私たちの村は、世界自然遺産・白

神山地の麓にあり、小さくともキラリと輝く地域づくりを目指しています。東北地方でも有数の大きさを誇る津軽ダム（津軽白神湖）建設を抱え、全国でも唯一「世界遺産と水源の里」の名にふさわしい自治体です。白神のブナ原生林を源として流れる岩木川は、豊かな津軽平野を潤し、眼上には雄々しい姿の岩木山を望む風光明媚な景観を多く持ち、貴重な手つかずの自然の宝庫となっています。

今年、白神山地世界自然遺産登録20周年を迎え、多くの人々に注目され、さらには、訪れていただく魅力ある地域として歩めるよう努力を重ねてまいりたいと思っております。特に、白神山地と共に輝く村、自然と共生する地域づくりを進めている村として、そこに生活する住民がその普遍的な世界の中の宝としての価値をしっかりと認識できるよ

う、この土地での暮らしを後世に伝え残していきたいと考えております。その中で、郷土を愛し、日本を愛する吉幾三さんに西目屋のふるさと親善大使になっていただき共に「世界遺産と水源の里」に力を入れ、全国へ発信しながら、未来へ向けて更なる飛躍を成し遂げるため頑張りたいと思っております。

これまでを振り返りますと、「寒く貧しく政争の激しい村」のイメージを払拭するため、当時、村として「世界の白神から日本一若い村長を出そう」という私のキャッチフレーズをアピールし、「子どもとお年寄りにやさしい村づくり」を基本に、新しい政策を打ち立て、その公約を実行することで、村のイメージが変わるように努力してきた結果、村始まって以来の無投票再選を果たしました。そして、「村政の継続へ」と確かな歩みを進めさせていただいて

自分たちが住む地域に「自信と誇り」が持てるよう、「好きです西目屋」をモットーに魅力ある村づくりを進めてまいります。

最後に、村長就任以来、津軽選挙によって疲弊してきた村民に対し言い続けていることを紹介申し上げるつもりです。

『だれかが村を一つにまとめる役をしなくてはならない。だれかがやってくれるだろうといった気持ちでいては事ばならない。確かに一人では何もできないが、一人が始めなければ何事も始まらないのだ。』



▷郷土を愛する吉さんと共に、全国に「世界遺産と水源の里」をPRしていきます。